

## 初心と顛末 —教師生活を終えるにあたって—

竹本 洋

(関西学院大学名誉教授)

漱石のような偉大な人を引き合いにだして気が差すのですが、かれは『文学論』の「序」で「春秋は十を連ねて吾前にあり。学ぶに余暇なしとは云わず、学んで徹せざるを恨みとするのみ、卒業せる余の脳裏には何となく英文学に欺かれたるが如き不安の念あり」と記しています。わたしにも教師生活37年というたっぷりとした十分すぎる時間があったにもかかわらず、「学んで徹せざるを恨みとする」という、みずからの怠慢としかいいようのない不徹底な研究生活に羞恥をおぼえます。また漱石に倣って、英文学にではなく経済学に「欺かれたるが如き不安の念あり」とつぶやいてみたい誘惑にもかられます。とはいえ言うまでもなくわたしは経済学を極めたわけではありませんから、漱石の肩に乗ってそのようにつぶやくのは身の程知らずということになるでしょう。

わたしが教師になったのは教育にたいする高邁な理想や確固たる信念があったからではありません。将来への見取図をえがくことなく大学を卒業しある企業に就職をしたのですが、早々と自分はサラリーマンに向いていないと見きりをつけてしまいました。あとから振り返れば、たんなる甘えであり若さゆえの速断にすぎないのですが、すぐに大学院の入学試験にむけてドイツ語の復習を始めました。幸い試験に合格し、大学院生活をあたらしく大阪の地で始め、そして数年後に大阪経済大学に経済学史の科目担当者として就任しました。こうしてとにもかくにも自分で生活をきずくことのできる大学教師という足場がみつかりました。

教師という思いがけない道に進むことになって、わたしは三つのおもいをもちました。一つは、唐突に聞こえるかもしれませんが、教師として学生を戦場に送ることはしたくない、ということでした。それは学生を鼓舞して戦場に赴かせ、戦後になってそのことを悔んでいる先輩教師たちがいることを知っていたからです。勤めはじめた大阪経済大学に戦争の記憶を残す校舎がありましたが、関西学院大学にも戦争の遺構というべきものがいくつかあることを知りました。また時計台の前で撮られた「学徒出陣壮行会」の記念撮影写真を目にしてからは、中央芝生に立って端麗な時計台を正面に仰ぎ、いまの屈託のないゼミの学生たちが軍服姿で居並ぶ姿を脳裏に浮かべ、その幻影にしばし身をまかせることがありました。幸いその幻はうつつにはなりませんでしたが、それは政府の責任者たちが学生を駆りだすような戦争に踏み切らなかったというたまさかの幸運によるものです。とはいえ人の世に絶対といいきれることはないのですから、「戦争が廊下の奥に立っていた」という渡辺白泉の有名な句のように、戦争がいつ現実のものにならないともかぎりません。わたしもまた鈍感さに足を取られて時代の奔流に流されているのかもしれない。



学徒出陣壮行会(1943年春)

二つめは、学生から知的怠慢や知的欺瞞という非難を受けない授業をしたい、ということでした。大学教師という仕事は研究を基盤として初めてなりたつものですから、これはとりたてて自分に言い聞かせることではなく、むしろ当然のことのように思われます。しかしこうした初心を抱いたのには、わたしが大学院に入学したころに全国の大学でいわゆる大学紛争が起こっていたことと無関係ではないような気がします。37年間の教師生活のなかでもここ10年ほどで学生気質が大きく変化したと実感していますが、いまでも若い人の直感の鋭さ、とりわけ教師の学問的深さや社会的姿勢のありようを直感的に嗅ぎ分ける能力には変わりがないと思っています。わたしはその批判的なまなざしをずっと怖れてきました。それはわたし自身が学生時代に一部の教師たちに向けたまなざしでもあったからです。そのため自分が教師になったときに、既成の学問的枠組みによりかかって、教科書的知識を切り売りするような授業を避けたいと思っ

たのです。いいかえると、研究の持続と蓄積のなかから「自分の言葉」といえるものを見出して、それでもって学生にゆっくりと語りかける授業をしたかったのです。もちろんそれはわたしの能力を超えた猿猴捉月のごときおもいでした。しかし当時は、通念や通説に安住しない研究と教養 - この言葉はこのごろとみに評判が悪いようですが - とをあわせて積み重ねることで、両者がおのずから融合し奥深い「学識」といったものができあがるのではないかと淡く期待したのです。

三つ目は、教師らしい「臭気」を発しない人格を身につけたいと思いました。教師はあらゆることを知っているかのような顔をして、「知らない」とはなかなか言わないものです。しかし知らないことを知らないと言わないと(逆にいえば、自分なりに分かったことをそのかぎりで明快に語らないと)いつのまにか鉄面皮をかぶった教師ができあがり、教師を辞めるまでそれを外せなくなるでしょう。外したときには、素顔も変わりかかっているかもしれません。また教師は命令調で語ることがならぬ性になりがちです。学生や社会に対して政策提言などをするばあいに、なんの躊躇もなく「何々をせよ」式のもの言いをする大学教師が目立ちます。この上から目線の語り口は、浅薄さのあらわれのようにわたしには思われます。なぜなら学にたずさわる者の矜持と謙虚さは、学問のもつ固有の力だけでなくその限界をも良く知るところから生まれるからです。

さらにわたしは「先生」と呼ばれることに馴れ、その呼び名あるいは肩書きに不感症になることを怖れていました。人前でたとえば電車のなかで、教師同士がおたがいを先生と呼びあって声高に話している場面にでくわすと、他人ごとながら顔が赤らむ気がして、しまいにはその無神経さに不快な気分になります(このごろ電車のなかで臆面もなく化粧をする女性に出会うことが珍しくなくなりましたが、その他人が眼中に入らない姿に遭遇したときの不快さとどこか似ています)。わたしは学部長として臨んだ最初の教授会で、同僚のみなさんを何々先生と呼びませんし、できればみなさんもわたしのことを先生と呼ばないようにしてくださいとお願いしました。もちろん強制することはできませんので、文字どおりお願いだったのですが、そのあと何人かの同僚からは竹本さんと呼ばれるようになりました(もっとも今年、ゼミのある学生から「タケちゃん」と呼びかけられたときは、開いた口がふさがりませんでした)。教師らしくならないように、わたしなりに「遊び」(遊蕩ではありません)の機会をつくり、心の余裕をもとうとしてきたのですが、わたしの子どもに言わせるとサラリーマンにはとても見えないとのことですから、やはりどこかで教師臭さを匂わせているのかもしれない。

上の教師としての三つの初心を形あるものに結実できたとはとても言えないのですが、大学教師のもう一面である研究者としては、日のあたらぬもの、周辺に追いやられているものへの目配りを忘れないように心がけてきました。大袈裟にいうと、主流からはずれた異端的な経済学や思想にこそ次代の指針となるものが埋もれていると考えていたからです。こうした研究も冒頭に触れたように今も中途半端のままです。おそらく死を迎えるときも同じ状態があるいはむしろいまよりも後退しているかもしれません。若いときに軽率にもサラリーマンに向いていないと判断してしまいましたが、では研究者に向いていたのかと問われそうです。向いている・いないは最初からわかるものではなく、失敗を重ねながらも仕事を継続し、しだいに自分のスタイルを形づくることで、おのずからその仕事に向いていた「かのように」なるしかないもののように思われます。その意味では、わたしは大学教師(研究者)にすこしは向いていたといまは思えるようになりました。それはながい教師生活の末にえられた小さな喜びでありなくさめでもあります。

#### 【付 記】

本稿は経済学部チャペル恒例の「退職者の講話」(2012年12月18日)で話したことを文字に起こしたものである。したがって文体も話し言葉になっている。事前に準備していた「私たちに地平線は見えるか」という題の話を当日登壇して急遽本稿の話題に変更した。なお「私たちに地平線は見えるか」は、経済学部の雑誌『エコノフォーラム 21』No. 19(2013年3月刊行)に掲載した。



大学紛争の嵐の中、全共闘の学生により時計台前のヒマラヤ杉が切り倒されました。これはその3時間前に撮影された写真です(1969年6月9日)。